BAYSIDE PRESS ベイサイドプレス
—経・済・誌—
12 2010 Vol. 09 21

Theater シアターY［横浜経済劇場］

偶然の出会いに導かれ

INDEX

01 シアターY［横浜経済劇場］
02 我が社の人材戦略［スリーエフ］ 伸びる経営abc
03 シアターY HAMA JOB
04 inside INVITATION to OPEN YOKOHAMA 2010
05 YOKOHAMA Creative Site vol.2
06 水先案内人 社員ブログ
07 大学発 人事往来 かながわ経済ファイル
08 CSR

それは偶然の発見だった。郷土史愛好家の山本博士（41）は昨年暮れ、横浜市神奈川区の高層マンションにある自宅で、日本の骨董品を扱う海外のインターネットオークションを眺めていた。

明治時代を代表する横浜の陶工・宮川香山（1842—1916）の「眞葛焼」に魅せられていた。多くが輸出され、戦災で消えてしまった眞葛焼。その"幻の器"を探していたのだが、出品されていた1枚の着色写真に目がとまった。

全体に黄色みがかったモノクロ写真で、部分的に緑や赤で着色されている。余白には「YOKOHAMA」の文字。石積みを土台とした構造物が海に突き出ている。「もしや、これは歴史的な写真では」と直感。「どうしても入手したい」とメールした。出品した米国の骨董商から高額の請求を覚悟したが、たった10ドルだった。

写っていたのは、横浜開港の翌1860年に築造された「神奈川台場」だった。開港資料館（横浜市中区）に調べてもらうと、明治中ごろに撮影されたとみられ、保存状態は良いとされた。山本は、郷土史がもたらす巡り合わせに身震いした。

神奈川台場は、現在の住所では神奈川区神奈川1丁目。偶然にも、山本の自宅マンションから見渡せる一帯にあった。台場は完成から約40年後に廃止されて埋め立てられたが、当時築かれた石垣の一部は、今も見ることができる。その程度のことは知っていた。

実は、「150年前のほぼ完全な形で埋蔵されている」。そう山本に教えた男がいた。

昨年の初夏、一心不乱に雑草を除き、台場の石垣を手入れしている男がいた。何度も見かけていた山本が声を掛けた相手は、神奈川地域活性化推進協会の専務理事・野渡圭一（75）だった。30年間、神奈川台場の歴史的価値を説き、保存や再整備の重要性を訴えてきた1人だ。

写真の発見をきっかけに、野渡たちと神奈川台場について語り合うようになった。14門の大砲が設置されたが、外国船が「象の鼻」（中区）に来航した際、歓迎の意味を込めて祝砲を放ったという。戦争に使われたことは一度もない、という史実に深い感銘を受けた。

山本は洋菓子製造販売「モンテローザ」を展開する三陽物産（中区長者町9丁目）の社長を務める。「祝いのシンボル、神奈川台場をモチーフにした縁起菓子を作りたい」

台場を設計したのは、あの勝海舟ということが決め手だった。「勝という字の力強さ、祝砲として使われた縁起の良さ、そして今も埋蔵されている運の良さ」。菓子のイメージが次々と思い浮かんだ。

名称は「勝サブレ」で決まった。折しも、今年は築造150周年。偶然の重なりが、運命を呼び込んだ。

（敬称略、Ⅲ面に続く）

Theater シアターY

●1面から続く

歴史を継承するために

SANYO BUSSAN + KANAGAWA DAIBA

神奈川台場の写真を発見した山本博士さん（左）と談笑する野渡圭一さん＝横浜市中区の神奈川地域活性化推進協会事務所

三陽物産社長の山本博士から今年1月、縁起菓子「勝サブレ」の開発を命じられた工場長の藤田雅一（39）は苦悩していた。

「横浜の歴史を菓子で表現したい」という山本の、思いを込めた指示は、サブレを神奈川台場の形にせよ。どうすれば実現できるのか—。

神奈川台場は函館の五稜郭と同じ稜堡式の石積みを採用。海に突き出た扇形の左右の角と真ん中に稜堡（凸角部）が設けられていた。焼き上げると、その特徴的な鋭角部分が円みを帯びてしまうのだ。かといって、堅くしすぎると食感が損なわれてしまう。

山本が定めた発売日は4月1日。新商品の開発期間は通常、半年から1年をかけるが、今回は3カ月しかない。「誰にも喜ばれる縁起菓子の王道をいく商品にしたい、という気持ちで懸命だった」。そう藤田は振り返る。

生地に、とある工夫を重ねた結果、形が再現でき、バターの風味が強すぎず飽きがこない食感にまとまった。中央の「勝」の文字にはコーヒーなど自然材料を使った。手作りのため1日千枚しか焼けないが、藤田は「幸せになってもらえる菓子作りに携わることができた」。菓子職人として手応えを得た。

商品開発に取り掛かってから、神奈川台場の歴史を学び始めたのは藤田だけではない。営業部長の福田雅二（57）は「営業担当者が横浜の歴史や『勝』の意味を説明できないのではみっともない」。山本の発案もあり、営業だけでなく全社員に声を掛けて会社負担で「かながわ検定横浜ライセンス」を受験した。

全社挙げて幕末から明治にかけての歴史に関心を持ち、勝海舟の思いを「勝サブレ」に再現させたことが、思わぬ史料との出合いを生むことになる。

山本は開発途中、たまたま訪れた京都市内の古書店で、勝が1862年に書いた手紙を見つけた。越前福井藩主の側近にあてたもので、冒頭に「過日者御紙面之処（先日手紙が届きましたが、夜まで神奈川表へ出ていました）」とあった。

最近になって、都内の骨董市で洋装した勝のポートレート写真を入手することができた。和装の勝が知られるが、洋装は珍しい。専門家はいずれの史料にも関心を寄せている、という。

「歴史に学ぶ姿勢はまじめそのもの。神奈川台場や勝との出合いは偶然のようでいて、導かれた運命だった」。今年築造150周年を迎えた神奈川台場が注目を集めるきっかけを作った山本を、神奈川地域活性化推進協会専務理事の野渡圭一が評する。

雨の中、神奈川台場の様子を見て歩く山本博士さん＝横浜市神奈川区

横浜に埋もれた歴史的価値を再発見する山本の姿勢は、横浜から世界に広まった眞葛焼の収集で培われた。コレクションのうち厳選した150点を「世界が愛したやきもの MAKUZU WARE 眞葛焼 初代宮川香山作品集」として、10月に出版する。

そして神奈川台場の近く、ポートサイド地区に10月10日、「宮川香山 眞葛ミュージアム」を開館させる。個人で構えていた記念館（南区）を発展させ、自社事業として位置付けた。会社として横浜の文化を継承する姿勢を打ち出す。

「文化を守り、歴史を継いでいくのはその地で生かされている企業の役割」。地域に貢献することで、はじめて企業が地域から生かされると、山本は考えている。

（敬称略）

横浜市内の百貨店や有名ホテル、商業施設などで販売されている「勝サブレ」
5枚入り 680円、10枚入り 1,260円、20枚入り 2,415円

DATA

●三陽物産
洋菓子販売店「モンテローザ」として店舗展開。「横浜三塔物語」「横浜ロリケット」「横浜バウムクーヘン玉椿の木」など、歴史を継承する横浜土産に力を入れる。創業は1962年。横浜市中区長者町9の155。☎045(251)8642
勝サブレのホームページ http://www.katsu-iwai.com

●神奈川地域活性化推進協会
京浜臨海部の活性化のため「神奈川台場」の保存や復元、再整備を進める趣旨で、2004年に県から設立認可された公益法人。斎藤文夫理事長。会員数84社・個人。横浜市中区相生町5の86、第1ホームベースビル3階。☎045(662)7009

【神奈川台場】日米修好通商条約で開港された横浜港の監視や警備のため、1860年に完成。波止場「象の鼻」とともに横浜港で最古の港湾建築物。当時の国際港では波止場と砲台、灯台がセットで整備されていた。台場の大きさは幅約240メートル、奥行き約90メートル。14門の大砲が設置され、約2.4キロ離れた象の鼻を向き、外国使節の到着時には祝砲を打った。1899年まで使われていたとみられる。